

〔論 文〕

遺族による死者の生きた証を伝承する活動の意義

—NPO 法人いのちのミュージアムが少年院で取り組む
「いのちの授業」が在院者へ及ぼす効果—

赤 田 ちづる*¹、坂 口 幸 弘*²

I. 緒言

事故・災害などで大切な人を突然に失った遺族が、受け入れがたい死へ向き合う方法の一つとして、「死者の生きた証を伝承する活動」がある。「死者の生きた証を伝承する活動」は、亡き人の死の意味を問い、存在を社会の中で生かし続け、死に新たな意味を付加する試みであるといえる(坂口, 2018 a)。実際、震災の語り部、体験談の出版、事故の再発防止活動、アート展の開催、慰霊碑の設置など、さまざまな活動や取り組みが広く行われている。これらの活動は、遺族の回復プロセスにおいても、社会的にも、ある一定の効果があることが示されている(坂口, 2018 b)。

犯罪被害者遺族で構成される NPO 法人いのちのミュージアムは「死者の生きた証を伝承する活動」のひとつとして、2008 年から少年院を含む矯正施設で「いのちの授業」に取り組んでいる。警視庁令和 2 年版犯罪被害者白書 (website) によれば、各刑事施設では 2006 年に受刑者の犯罪特性に応じて改善指導を行うことが義務付けられ、殺人や傷害致死などの生命犯の受刑者には「被害者の視点を取り入れた教育」が取り入れられることとなった。「被害者の視点を取り入れた教育」とは、罪の重さや被害者の心情を認識させ、被害者に誠意をもって対応するための方法を考えさせることを目標としている。実践としては、職員の講義、ゲストスピーカーによる講話、

グループワーク等が行われているが、教育プログラムが十分にデザインされているとは言い難い(浅野, 2011)。加えて「被害者の視点を取り入れた教育」が再犯を防止するどころか、再犯を促進させる可能性を孕んでいるとの指摘もある(津富, 2008、岡本, 2013)。

そこで、本研究では、少年院で取り込まれる「被害者の視点を取り入れた教育」のプログラムの一つである「いのちの授業」に着目し、「死者の生きた証を伝承する活動」のひとつである「当事者遺族によるいのちの授業」が、少年院在院者へ及ぼす効果を測定することを目的とした。

II. 方法

1. 対象と調査時期

関西地方にある A 少年院に在院中の少年、計 105 名を対象とした。調査期間は 2019 年 5 月から 6 月であった。

2. 用語の定義

「亡き人の生きた証の伝承」に関する明確な定義はないが、本論では、坂口 (2018) の用いた、「故人の存在や遺志、生きてきた人生を、有形無形を問わず、他者や社会に伝え継ぐ活動」と定義する。また、「いのちの授業」とは、「死を身近に感じた人が、生きることや死ぬことについて語り、いのちの大切さの学びを深めるもの」と操作的に定義した。

キーワード：犯罪被害者支援、いのちの授業、被害者の視点を取り入れた教育、死者の生きた証を伝承する活動

*1 関西学院大学大学院人間福祉研究科博士課程後期課程

*2 関西学院大学人間福祉学部教授

3. 介入プログラム

本調査では、対象者への介入プログラムとして、NPO 法人いのちのミュージアムに所属する交通犯罪遺族当事者が「いのちの授業」を実施した。プログラム内容は「遺族による詩の朗読」と「^{いのち}生命のメッセージ展」から構成されている。遺族による詩の朗読は、犯罪被害で家族を亡くした遺族自身が作成した「詩」を用いて、遺族の体験を対象者へ語るものであり、自身や他者のいのちの大切さを感じ、これからの未来を「生きる」ことへ目を向けさせることを目的とした内容となっている。また、「生命のメッセージ展」は、理不尽な事件・事故等で亡くなった被害者の等身大のパネルを展示し、対象者へ観覧させるものである。パネルには事件・事故の内容や遺族のメッセージ等が記載され、いのちの大切さを身近に感じてもらうことを目的としている。

4. 測定項目

1) 主要評価項目

本調査の主要評価項目には「自尊感情」と「命の意味づけ」を設定した。自尊感情の測定には近藤（2013）が開発した「社会的・基本的自尊感情尺度（SOBA-SET： Social Basic Self-Esteem TEST）」を使用した。SOBA-SETは「社会的自尊感情（以下、SOSE）」と「基本的自尊感情（以下、BASE）」の2因子から構成される尺度であり、SOSEとは、他者との比較によって相対的なものとして形成される「とても良い、できることがある、役に立つ、価値がある、人より優れている」といった感情であり、BASEとは、他者との比較や相対的な評価によるものではなく「生きていていい、このままでいい、これ以上でも以下でもない、自分は自分」といった感情である。本調査ではSOSE・BASEを構成する各6項目の合計得点（得点範囲：6～24点）をSOSE得点・BASE得点として使用し、得点が高いほど対象者のSOSE・BASEが高いことを意味する。命の意味づけの測定には池田らが開発した「命の意味づけ尺度」6項目から、各因子の因子負荷量の高い3項目、計18項目を用いた。命の意味づけ尺度は、「命としてあることの実感」「自分の命を人のために役立てたいという使命感」「世代を超えた

命のつながり感」「命の相互のつながり感」「自他の命の証を遺したいという願い」「限りある命の実感」という6下位尺度から構成されている。池田ら（2013）は、「命の意味づけ」を「命に意味を付与すること」と定義し、①自分が命を与えられた存在であることに気づくこと、②自分の命と他のすべての命がつながっていることに気づくこと、③命として存在している自分を積極的に生かそうとすること、④命として生かされている存在として世界にかかわり世界を変えていくように働きかけることが重要だとしている。

2) 副次評価項目

本調査の副次評価項目は、独自に作成した「いのちについての思考」1項目とした。「いのちについての思考」は、「私は、いのちについて普段からよく考えていると思う」と質問し、それぞれ、4段階リッカート法（1=そう思わない、2=あまりそう思わない、3=そう思わない、4=そう思う）で得点化、得点が高いほど思考する頻度が高いことを意味する。

3) いのちの授業に対する認識

いのちの授業に対する対象者の認識を得るため、いのちの授業による気づき（11項目）、いのちの授業に対する評価（5項目）を独自に作成、4件法での回答を求めた。

4) 死別経験

介入効果に影響を与える可能性のある要因として「死別経験」を測定した。「大切な人と死別した経験がありますか？」と死別経験の有無を尋ね、死別経験がある場合には、対象者からみた続柄について尋ねた。

5. 調査方法

データ収集は、自記式質問紙を用いて、ベースライン（介入前）・介入後（介入プログラム実施日）・フォローアップ（介入1か月後）の時点で計3回実施した（図1）。対象者への自記式質問紙の配布は、担当刑務官が実施した。回答は、いずれも無記名で行ったが、質問紙へ通し番号を記載し、番号から対象者を特定、計3回実施した自記式質問紙の回答を紐づけデータ化した。

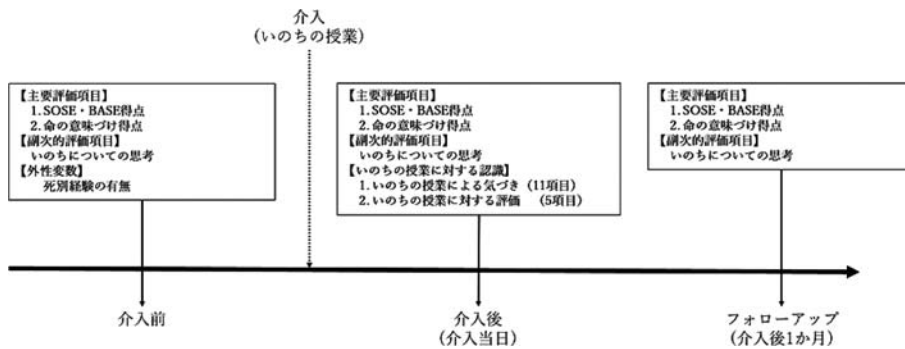


図1 本調査のフローチャート

6. データ分析

介入前の主要評価項目・副次評価項目の記述統計量を算出し、介入効果の検証におけるベースラインを確認した。また、ベースラインにおける主要評価項目・副次評価項目と死別経験との関連について、 t 検定を行い検討した。主要評価項目・副次評価項目については、ベースライン・介入後・フォローアップの3時点での経時的変動を反復測定による一元配置分散分析と多重比較から検証した。死別経験の交互作用については、主要評価項目・副次評価項目を目的変数とした二元配置分散分析から検証した。主観的評価項目については、いのちの授業による主観的变化(11項目)の回答を「あてはまらない」「あてはまる」の2値、いのちの授業の必要性の認識(5項目)を「そう思う」「そう思わない」の2値へ変換し、各項目の記述統計量を算出した。統計解析には、SPSS Ver.26を使用し、有意水準は5%とした。

7. 倫理的配慮

本調査は、調査対象者に未成年が含まれ、尚且つ、少年院の在院者であることから、特別な配慮が必要になると考えられた。そのため、A少年院責任者と本調査の研究責任者とで相互の連携を図り、調査が適切に行われるよう共同研究協定書を作成し、記載項目を誠実に履行することとした。また、協定書は2部作成し、両方が記名・押印のうえ、それぞれ1部を所持することとした。調査にあたっては、事前に在院者へ対し、本調査への回答は任意であること、回答によって心身の不調が予想される場合は回答を控えてよいこと、回答を控えることによって処遇上の不利益を被る

ことはないこと、を口頭にて伝え同意を求めたうえで、質問紙への記入および提出をもって同意を得たものとみなした。未成年在院者の同意については、A少年院責任者の同意と本人の質問紙への記入および提出をもって同意とみなした。さらに、各回答を比較検討するために質問紙へ通し番号を記載したが、通し番号による個人の特定はできないように作成した。本調査は、「関西学院大学人を対象とする行動学系研究倫理委員会」の承認を得ている(承認番号2019-13)。

Ⅲ. 結果

ベースライン・介入後・フォローアップの3時点で105名の対象者から自記式質問紙が回収され(回収率100%)、全ての回答を有効回答とみなした。

1. 対象者の基本属性

死別経験のある対象者の割合は68.6%(72名)であった。死別経験がある者のうち、続柄別での死別経験では、友人が最も多く(43.1%)、次いで祖父母であった(41.7%)(表1)。

2. ベースラインの主要・副次評価項目得点

ベースラインでの主要・副次評価項目の平均得点は表2に示す。また、ベースラインでの主要評価項目・副次評価項目得点と死別経験の有無との関連について、 t 検定を用いて検討した結果、いずれの項目においても死別経験による有意な差は認められなかった(表2)。

3. ベースライン・介入後・フォローアップでの 主要・副次評価項目得点の経時的変動

反復測定による一元配置分散分析と多重比較から、ベースライン・介入後・フォローアップの3時点での主要評価項目の得点の経時的変動を確認した。その結果、主要評価項目である「SOSE 得点」、「BASE 得点」においては、介入による得点の有意な経時的変動は認められなかった。いのちの意味づけ尺度の、「命の相互のつながり感」、「自他の命の証を遺したいという願い」において

は、介入による得点の有意な経時的変動は認められなかったが、「命としてあることの実感」、「自分の命を人のために役立てたいという使命感」、「世代を超えた命のつながり感」、「限りある命の実感」では、介入による得点の有意な経時的変動が認められ、介入プログラムが、自身が今生かされていることを実感し、その命を誰かのために役立てたいと考えるきっかけとなったことが示された。多重比較の結果、「命としてあることの実感」、「自分の命を人のために役立てたいという使命感」、「世代を超えた命のつながり感」は、ベースライン (9.41±2.98、9.27±3.58、7.93±3.32) に比べ、介入後 (10.13±2.16、10.10±4.06、10.04±3.72)、フォローアップ時 (10.74±3.11、10.04±3.72、8.88±3.67)、それぞれの平均得点が有意に高いことを認め、「限りある命の実感」では、ベースライン (10.66±3.12) よりフォローアップ時 (11.43±2.68) の得点が有意に高いことが示された。つまり、介入プログラムの効果が一時的なものではなく持続することが明らかになった。副次評価項目である「いのちについての思考」においても、介入による有意な経時的変動が認められ、多重比較の結果からは、ベースライン

表1 対象者の死別経験 (n=105)

| | | n | % |
|--------------------------|-------|----|------|
| 死別体験 | あり | 72 | 68.6 |
| | なし | 30 | 28.6 |
| | 無回答 | 3 | 2.9 |
| 続柄別での死別体験 ^{a,b} | 友人 | 31 | 43.1 |
| | 祖父母 | 30 | 41.7 |
| | ペット | 26 | 36.1 |
| | 曾祖父母 | 14 | 19.4 |
| | きょうだい | 4 | 5.6 |
| | 父 | 2 | 2.8 |
| | 母 | 1 | 1.4 |
| | その他 | 15 | 20.8 |

a: 死別経験ありと回答した者のみ (n=72)

b: 重複回答あり

表2 主要・副次評価項目得点と死別経験の関連

| | ベースラインの 得点 (n=105) | | 死別体験別での平均値の差 (n=102) | | | | | |
|-----------------------|-----------------------|------|----------------------|-------|-------|------|-------|------|
| | mean | SD | 死別体験 | n | mean | SD | t 値 | p |
| 社会的自尊感情 (SOSE 得点) | 14.36 | 1.41 | なし | 30 | 14.73 | 1.41 | 1.13 | 0.26 |
| あり | | | 72 | 14.37 | 1.48 | | | |
| 基本的自尊感情 (BASE 得点) | 18.60 | 2.32 | なし | 30 | 18.17 | 2.2 | -1.29 | 0.20 |
| あり | | | 72 | 18.82 | 2.39 | | | |
| 命としてあることの実感 | 9.41 | 2.98 | なし | 30 | 9.27 | 3.26 | -0.25 | 0.80 |
| あり | | | 72 | 9.43 | 2.92 | | | |
| 自分の命を人のために役立てたいという使命感 | 9.27 | 3.58 | なし | 30 | 9.30 | 4.22 | 0.15 | 0.88 |
| あり | | | 72 | 9.18 | 3.29 | | | |
| 世代を超えた命のつながり感 | 7.93 | 3.32 | なし | 30 | 7.63 | 3.38 | -0.35 | 0.73 |
| あり | | | 72 | 7.89 | 3.34 | | | |
| 命の相互のつながり感 | 8.41 | 3.13 | なし | 30 | 8.10 | 2.7 | -0.26 | 0.79 |
| あり | | | 72 | 8.28 | 3.29 | | | |
| 自他の命の証を遺したいという願い | 10.09 | 3.22 | なし | 30 | 9.27 | 3.88 | -1.40 | 0.17 |
| あり | | | 72 | 10.29 | 3.16 | | | |
| 限りある命の実感 | 10.66 | 3.12 | なし | 30 | 10.00 | 3.63 | -0.97 | 0.33 |
| あり | | | 72 | 10.67 | 2.95 | | | |
| いのちについての思考 | 2.27 | 0.95 | なし | 30 | 2.20 | 0.81 | -0.46 | 0.65 |
| あり | | | 72 | 2.29 | 0.97 | | | |

(2.27±0.95) に比べ、介入後 (2.48±0.85) とフォローアップ (3.68±1.10) の両時点で平均得点有意に高いことが認められた。介入プログラムによって、いのちについて考える機会が増え、さらにその機会は一時的なものではなく、持続していることが示された。

また、介入による SOSE 得点、BASE 得点、命の意味づけ得点の経時的変動に対する死別経験の交互作用を反復測定による二元配置分散分析から確認した結果、「SOSE 得点」(F(1.943,171)=0.12, p=0.88)、「BASE 得点」(F(1.872,164.7)=

0.12, p=0.88)、「命としてあることの実感」(F(1.950,171.6)=0.15, p=0.86)、「自分の命を人のために役立てたいという使命感」(F(1.832,161.3)=0.48, p=0.61)、「世代を超えた命のつながり感」(F(1.906,167.8)=0.06, p=0.94)、「命の相互のつながり感」(F(1.856,163.3)=0.96, p=0.38)、「自他の命の証を遺したいという願い」(F(1.925,169.4)=0.12, p=0.88)、「限りある命の実感」(F(1.979,174.1)=0.23, p=0.80) のいずれにおいても有意な交互作用は認められなかった。これにより、介入プログラムの効果に、在院者の死

表3 ベースライン・介入後・フォローアップでの主要・副次評価項目得点の経時的変動 (n=90)

| | ベースライン (実施前) | | 介入後 | | フォローアップ (1か月後) | | F 値 | P 値 | 効果量 (partialη ²) |
|-----------------------|-----------------|------|-------|------|-------------------|------|-------|----------|---------------------------------|
| | mean | SD | mean | SD | mean | SD | | | |
| 社会的自尊感情 (SOSE 得点) | 14.36 | 1.41 | 14.58 | 1.76 | 14.74 | 1.87 | 2.25 | 0.11 | 0.03 |
| 基本的自尊感情 (BASE 得点) | 18.60 | 2.32 | 18.90 | 2.36 | 18.87 | 2.17 | 1.44 | 0.24 | 0.02 |
| 命としてあることの実感 | 9.41 | 2.98 | 10.13 | 2.16 | 10.74 | 3.11 | 5.85 | 0.00**注a | 0.06 |
| 自分の命を人のために役立てたいという使命感 | 9.27 | 3.58 | 10.10 | 4.06 | 10.04 | 3.72 | 3.64 | 0.03**注a | 0.04 |
| 世代を超えた命のつながり感 | 7.93 | 3.32 | 9.22 | 4.02 | 8.88 | 3.67 | 6.34 | 0.00**注a | 0.07 |
| 命の相互のつながり感 | 8.41 | 3.13 | 8.97 | 3.93 | 8.78 | 3.47 | 1.16 | 0.31 | 0.01 |
| 自他の命の証を遺したいという願い | 10.09 | 3.22 | 10.81 | 3.63 | 10.36 | 3.31 | 1.97 | 0.15 | 0.02 |
| 限りある命の実感 | 10.66 | 3.12 | 11.23 | 3.20 | 11.43 | 2.68 | 2.52 | 0.08**注b | 0.03 |
| いのちについての思考 | 2.27 | 0.95 | 2.48 | 0.85 | 3.68 | 1.10 | 68.71 | 0.00**注c | 0.44 |

*Mauchly の球面性検定にて有意であったため Greenhouse-Geisser で自由度を調整した結果
 注 a : Bonferroni による多重比較の結果、5% 水準で、実施前<実施後、1か月後となった
 注 b : Bonferroni による多重比較の結果、5% 水準で、実施前<1か月後となった
 注 c : Bonferroni による多重比較の結果、5% 水準で、実施前<実施後<1か月後となった

*p<.05, **p<.01

表4 いのちの授業による気づき (n=105)

| | n | % |
|-------------------------------|----|------|
| 死はいつ自分に起きてもおかしくないと思った | 90 | 85.7 |
| いのちの尊さを強く感じた | 89 | 84.8 |
| 理不尽に家族のいのちを奪われた遺族の悲しみやつらさを感じた | 89 | 84.8 |
| 突然未来を奪われた亡き人の悲しみを感じた | 88 | 83.8 |
| 生きている喜びやありがたさを改めて感じた | 87 | 81.0 |
| 自分は決して加害者にならないと決意した | 80 | 76.2 |
| 社会にこれほど理不尽な死があることに改めて気づいた | 79 | 75.2 |
| 周りの人にも今日感じたことを伝えたい | 69 | 65.7 |
| 死を身近に感じて恐かった | 64 | 61.0 |
| 自分と同じような苦しみを抱える人がいることを知った | 50 | 47.6 |
| 自分も被害者支援の活動に関わりたと思った | 48 | 45.7 |

表5 いのちの授業に対する評価 (n=105)

| | n | % |
|--------------------------------|----|------|
| いのちについて学ぶことは必要だと思う | 91 | 86.7 |
| いのちについて考える機会になった | 88 | 83.8 |
| いのちに関わる問題を経験した人から話を聞くことには意義がある | 83 | 79.0 |
| 見たことや聞いたことを家族と話そうと思う | 77 | 73.3 |
| 見たことや聞いたことを友人と話そうと思う | 72 | 68.6 |

別経験の有無は影響しないことが示唆された。

4. いのちの授業に対する主観的評価

いのちの授業による主観的变化（11項目）において、最も多くの在院者が経験した主観的变化は「死はいつ自分に起きてもおかしくないと思った」（85.7%）であり、次いで、「いのちの尊さを強く感じた」（84.8%）、「理不尽に家族のいのちを奪われた遺族の悲しみやつらさを感じた」（84.8%）であった（表4）。いのちの授業の必要性の認識（5項目）では、対象者の86.7%が「いのちについて学ぶことは必要だと思う」と回答し、83.8%が「いのちについて考える機会となった」と回答した（表5）。

IV. 考察

本研究では、少年院で取り組まれている「被害者の視点を取り入れた教育」に着目し、犯罪被害者遺族が取り組む、「死者の生きた証を伝承する活動」のひとつである「いのちの授業」が少年院在院者へ及ぼす効果を測定することを目的とした。

これまで、非行と自尊感情の関係性には多くの研究者が注目し、自尊感情が低いと非行や反社会的行動などの問題が出やすいと指摘してきた。岡本（2013）は、「被害者の視点を取り入れた教育」を通して、被害者の心情を理解させることは、自身を生きる価値のない人間と思わせることになり、もともと自尊感情の低い在院者の自責感情を強め、再犯を起こす危険性を孕んでいることを指摘している。今回、ベースラインでの SOSE 得点、BASE 得点の平均得点は、近藤（2013）が「大きく安定した自尊感情」と定義した BASE 13 点以上、SOSE 13 点以上を大きく超えており、本調査で対象とした在院者に関しては自尊感情が低いとはいえない。加えて、ベースライン・介入後・フォローアップの3時点での主要評価項目の得点の経時的変動では、SOSE 得点、BASE 得点ともに、介入による得点の有意な経時的変動は認められなかった。つまり、今回の介入を通じて被害者の心情を理解させることが、自尊感情を下げるとはいえない。加えて、本プログラムが、自身

が今生きているいのちを実感させ、そのいのちを他者のために役立てたいと思わせ、自身が生きていることの意味を考えるきっかけとなったと考え、「被害者の視点を取り入れた教育」が再犯を起こす危険性を孕んでいると強調することは性急すぎると思われる。

いのちの意味づけにおいては、「命としてあることの実感」、「自分の命を人のために役立てたいという使命感」、「限りある命の実感」において、介入による得点の有意な経時的変動が認められた。被害者の視点を取り入れたいのちの授業が、一定の効果を有することが示唆された。また、副次評価項目である「いのちについての思考」においても、介入による有意な経時的変動を認めており、「いのちの授業」が「いのちについての思考」を動機づけることが示されている。

また、本調査では、90%の在院者が、「死はいつ自分に起きてもおかしくないと思った」と回答した。大人も含め、多くの人にとって、事件・事故のような犯罪被害は非日常的なことであるが、在院者が「死が自分に起きる可能性」を考えたことは、正面から死を見つめた結果であるといえるであろう。また、87%の在院者が、「生きている喜びやありがたみを改めて感じた」と述べており、死を直視することが「生」に目を向けることに繋がる可能性が示唆された。さらに注目すべき点は、「自分は決して加害者にならないと決意した」と答えた在院者が80%いたことである。様々な事例を見つめることで、自分は決して人を傷つけることはしないと改めて決心することは、そう遠くない未来に、理不尽にいのちを失う被害者が減っていくこと、つまり再犯の抑制に繋がる可能性もある。さらに、91%の在院者がいのちについて学ぶ機会が必要だと考え、83%が当事者から話を聞くことの有益性を感じている。これらの結果は、「死者の生きた証を伝承する活動」のひとつである当事者遺族による「いのちの授業」としての本プログラムの意義が示唆するものである。なお、「いのちの授業」を含む「亡き人の生きた証の伝承」に取り組む遺族への調査（坂口, 2018）によれば、遺族が活動をして良かったと思う時は、「取り組みを通して伝えたいことが伝わっていると実感できたとき」が最も多い（63

%)。さらに、回答者の88%が「いのちの授業」を含む「亡き人の生きた証の伝承」に関する活動が、亡き人のいない“今”を生きていくうえで「助けになっている」と答えていたことから、本研究で実施したプログラムが、在院者・遺族の双方に有益な効果をもたらす可能性があることが窺えた。

最後に、本調査の限界と課題として2点挙げる。少年院には4種の区分があるが、本調査は、関西地方にあるA少年院の在院者のみを対象としたにすぎない。さらに、在院者それぞれの犯罪傾向や養育環境に関する情報を得ることは叶わず、対象者に偏りがあることは否めない。しかしながら、交通犯罪遺族当事者が行ういのちの授業を通して、被害者の視点を取り入れた教育の効果の検証ができたことは大きな成果であると考えられる。今後は、当事者遺族が行う被害者の視点を取り入れた教育が、少年院出所後の少年の再犯に対してどのような影響を与えるのか検証する必要がある。また、介入によるSOSE得点、BASE得点、命の意味づけ尺度の経時的変動に対する死別経験の交互作用は認められなかったが、本調査における死別経験の続柄の多くは友人・祖父母・ペットであった。死別経験といえども、死別までの関わりがどの程度であったか等、様々な関係性があることを考慮すると、同居家族との死別体験等、外的変数を絞る必要があったかもしれない。さらに、交互作用を死別経験だけに断定せず、犯罪傾向や家族機能等と照らし合わせることも必要であると考えられる。

V. 結語

「被害者の視点を取り入れた教育」は教育プログラムが十分にデザインされておらず、成果を上げていないことが指摘されている。しかし、本調

査の結果からは、被害者の心情を知ることで在院者の自尊感情へ負の影響を与えることはなく、さらに、自身のいのちの意味について向き合い、考えることへの一定の効果が認められた。また、8割以上の在院者が被害当事者から話を聞くことを肯定的に捉えている。つまり、「被害者の視点を取り入れた教育」においては、被害者の視点を矯正教育に取り入れることを否定するのではなく、教育プログラムの内容と質が重要なのではないかと考えられる。

付記

本稿の調査は一般社団法人日本損害保険協会2019年度自賠責運用益拠出事業助成を受けて実施致しました。ここに記して感謝の意を表します。

参考文献

- 坂口幸弘 (2018 a) 「亡き人の生きた証の伝承」『アンジャリ』35, 26-29
- 坂口幸弘 (2018 b) 「事故・災害等で大切な人を突然に亡くした遺族が死者の生きた証を伝承することの効果」『平成29年度 JR 西日本あんしん社会財団研究助成 研究実績報告書』17 R 035.
- 警視庁令和2年版犯罪被害者白書 (<http://www.npa.go.jp/hanzaihigai/whitepaper/w-2020/pdf/zenbun/index.html>) 2020/11/23
- 浅野正 (2011) 「被害者の視点を取り入れた教育の効果的な実践」『人間科学研究立教大学』33, 137-144
- 津富宏 (2008) 「キャンベル共同研究介入・政策評価系統的レビュー1」龍谷大学矯正・保護研究センター
- 岡本茂樹 (2013) 「被害者の視点を取り入れた教育にロールレタリングを用いたプログラム効果の研究」『ゲシュタルト療法』(3) 47-57.
- 近藤卓 (2013) 『子どもの自尊感情をどう育てるか』ほんの森出版.
- 池田幸恭・落合亮太・菱谷純子他 (2013) 「命の意味づけ尺度の開発」『厚生指標』60(6) 15-22.

Significance of activities to leave an evidence
of the victim's life by the bereaved family :
Effects on reformatory inmates of
a Life Lessons intervention from “Inochi no Museum”

Chizuru Akata*¹, Yukihiro Sakaguchi*²

ABSTRACT

This study was performed to examine the effects of a Life Lessons intervention on self-esteem and awareness of the importance of life in reformatory inmates. The ideas in Life Lessons are conveyed from the viewpoints of victims. The Life Lessons intervention was provided by “Inochi no Museum”, a non-profit organization. The effects of this intervention were examined in 105 inmates of Reformatory A in the Kansai area.

There were no significant changes in social self-esteem (SOSE) scores and basic self-esteem (BASE) scores from before to after the intervention and in the follow-up period. Subscales on the importance of life, such as “mutual connections of lives” and “a desire to leave an evidence of other or own life,” also showed no significant changes over time after the intervention. However, scores for “feeling of being alive,” “sense of mission to use own life for others,” “connection of lives between generations,” and “recognition of a limited life” did show significant changes over time after the intervention. Furthermore, the frequency of having “thoughts about life” was significantly higher after the intervention and in the follow-up period, compared to that before the intervention.

Our results suggest that Life Lessons that take the viewpoint of victims into consideration can have certain effects on reformatory inmates regarding their feelings about their own life, the need to use their own life for others, and thinking about the importance of their life.

Key words : support for crime victims, Life Lessons, education from the viewpoint of victims, reformatory, Exhibition of Life Message

* 1 Graduate School of Human Welfare Studies, Kwansai Gakuin University

* 2 Professor, School of Human Welfare Studies, Kwansai Gakuin University